

金樓子譯注（十二）

興 膳 宏

說蕃篇八（承前）

37 劉讓^{*①}嗣爲梁王^②。初、孝王有疊尊^③、直千金、戒後世善寶

之、母得以與人。讓之后曰任后、聞而欲得之。讓之祖母李

太后曰、「先王有命、母得以尊予人也。他物雖鉅萬、猶自

恣^④」、「任后絕欲得之」^④。王讓直使人開府、即以尊賜任后。

又王及母陳后事李太后多不順。有漢使者來、太后欲自言、

王使謁者中郎胡等遮止、閉門。太后與爭門損指^{*⑤}。太后後病

薨^⑥。病時、任后未嘗請疾、又不侍喪。

劉讓（前漢の梁の平王）は父を嗣いで梁王となった。その昔、孝王（讓の祖父）は價千金の疊尊を持っていて、子孫

金樓子譯注（十二）（興膳）

にこれを大切に保存して、人に與えてはならぬといいつけ

ていた。讓の后を任后というが、それを聞いて疊尊を手に入

れたかと思つた。讓の祖母である李太后が「先王のご命

令で、それを人に與えてはならぬとされた。他の物なら巨

萬の値打ちがあるうとも、好きにすればよい」といつたが、

「任后はどうしてもそれを手に入れようとした。」「平」王

讓は直ちに人をやつて庫を開かせ、そのまま尊を任后に賜

つた。また王と母陳太后は李太后に事えてその意に順わぬ

ことが多かつた。漢の使者がやつて來た際に、李太后は自

らそのことを告げようとしたが、王は謁者中郎の胡等に阻

止させて、門を閉めさせた。太后は門での争いで指をけが

した。太后はのち病のため薨じた。太后の病臥中、任后は

一度も見まいに行かず、「[]くなくても」また喪に服さな

かつた。

〔校勘〕

*讓・底本校記に、「前史作襄」。『漢書』も「襄」に作るが、『太平御覽』七六一に引く『漢書』は「讓」に作る。注①参照。
*先・底本には上に「后」字が有り、抄本・四庫本も同じだが、

『永樂大典』三五八四の九眞鬮尊に引く『金樓子』及び百子本により、削る。*王…『永樂大典』無し。*直…抄本・四庫本無し。*即…『永樂大典』無し。*太后…抄本・四庫本↓李后。*損指…百子本↓措指。抄本欄外注に、鮑本損誤措。*請疾…百子本↓問疾。

〔注〕

① 劉讓 劉讓(？前一〇二?)は、梁の孝王武の孫で、共王買の子。母は陳太后。『史記』五八梁孝王世家は「讓」を「襄」に作り、『漢書』四七三文三王傳も同じだが、『史記』索隱には「漢書」作讓」とある。『金樓子』は『漢書』にもとづいており、『太平御覽』七六一器物部八樽彝に引く『漢書』も「讓」に作っていて、著者の見た『漢書』では「讓」に作っていたものと思われる。

② 嗣爲梁王 『漢書』文三王傳に、「梁孝王子五人爲王。太子買爲梁共王、次子明爲濟川王、彭離爲濟東王、定爲山陽王、不識爲濟陰王、皆以孝景中六年同日立。梁共王買立十年薨、子平王襄嗣」。なお『漢書』はほぼ『史記』梁孝王世家にもとづくが、『金樓子』は『漢書』に據っているの、以下の注には『漢書』を引く。

③ 初、孝王有豐尊云云 『漢書』本傳に、「初、孝王有鬮尊、直千金、戒後世善寶之、母得以與人。任后聞而欲得之、李太后曰、「先王有命、母得以尊與人。他物雖百鉅萬、猶自恣」。任后絶

欲得之。王襄直使人開府取尊賜任后。又王及母陳太后事李太后多不順。有漢使者來、李太后欲自言、王使謁者中郎胡等遮止、閉門。李太后與爭門、措指。太后啼諱、不得見使者。『鬮尊』について、顏師古注には以下の如くいう。「應劭曰、『詩云』酌彼金鬮。鬮、書雲雷之象、以金飾之也。鄭氏曰、『上蓋刻爲山雲雷之象』。師古曰、『鄭說是也。鬮、古雷字』」。

④ 任后絶欲得之 『金樓子』はこの六字を缺くが、『漢書』により補う。

⑤ 損指 『漢書』は「措指」に作る。顏師古注に音灼曰くとして、「許慎曰、『措、置。字借以爲笮耳』。また師古曰、「音壯客反、謂爲門扉所笮」。

⑥ 太后後病薨 『漢書』本傳に、「後、病薨。病時、任后未嘗請疾。薨、又不侍喪」。

38 劉次昌爲齊王。其母曰紀太后、取弟紀氏女爲王后、不愛。紀太后欲其家重寵、令其長女紀翁主入王宮、其後宮無令得近王、欲令愛紀氏女。王因與其姉翁主姦。齊有宦者徐甲、入侍漢皇太后。有愛女曰脩成君、非劉氏子、太后憐之。脩成君有女娥、太后欲嫁之於諸侯。宦者甲乃請使齊、必令王上書請娥。皇太后喜、使甲之齊。時主父偃知甲使齊以取后事、亦因謂甲、「即成、幸言偃女願得充王後宮」。甲至齊、

風以此事。紀太后怒曰、「王有后、後宮備具。^{*}且甲齊貧人、及爲宦者入事漢、初無補益、乃欲亂吾王家。且主父偃何爲者、乃欲以女充後宮」。甲大窮、還報皇太后曰、「王已願尚娥、然事有所害、恐如燕王」。燕王者、^⑧與其子昆弟姦、新坐死。故以燕感皇太后。太后曰、「母復言嫁女齊事者也」。事浸淫聞於上。^⑨

劉次昌（前漢の齊の厲王）は齊王になった。その母を紀太后といい、弟のむすめを王の后にしたが、王は彼女を愛さなかつた。紀太后は實家が恩寵を受けるよう願つて、自分の長女の紀翁主を王宮に入れて、後宮の女たちが王に近づかぬようにさせ、王が紀氏のむすめを愛するように仕向けた。王はそこで姉の翁主と姦通した。齊に宦官の徐甲なる者がいて、宮中に入り漢の皇太后（武帝の母）に仕えていた。「皇太后には」脩成君というむすめがいて、劉氏の子ではなく、太后は彼女を不憫に思っていた。脩成君には娥というむすめがあり、太后は娥を諸侯に嫁がせたいともくろんでいた。宦官の徐甲はそこで齊に使者として赴き、齊

王に娥をもらい受けるよう上書させたいと願い出た。皇太后は喜び、徐甲を齊に派遣した。その時、主父偃は徐甲が后を娶るための使者として齊に赴くことを知つて、甲に向かつていうには、「もしことがうまく運んだら、どうか私のむすめを後宮に入れるよう申し上げてくれ」。徐甲は齊に着くと、そのことをほのめかして言つた。紀太后は怒つて言つた。「王には后があり、後宮も満ち足りている。それに徐甲は齊の貧乏たらしで、宦官となつて漢朝に仕えても、何の役にも立たず、なんとわが王家を亂そうとしおる。また主父偃とは何者じゃ、むすめを後宮に入りたいなどと申しおつて」。徐甲は困り果て、歸還して皇太后に報告していうには、「王はすでに娥を娶るおつもりですが、障害がございまして、つまり燕王（劉定國）のようになりはせぬかといふこととございます」。燕王は自分のむすめや姉妹と姦通し、其の罪で死んだ。それで燕のことで太后に感づかせようとしたのである。太后はいつた、「もう二度と孫むすめを齊に嫁がせるなどというでないぞ」。そのことは次第に傳わつて天子の耳にも入つた。

〔校勘〕

*取・抄本・百子本は上に「太后」二字がある。*不・抄本・百子本は上に「王」字がある。*其・抄本・百子本は上に「正」字がある。*令・底本は主に作るが、抄本・百子本により改める。
*有愛女・抄本・百子本は上に「皇太后」三字がある。*脩成君・抄本・四庫本は「君」字を缺く。*成・抄本・百子本は上に「事」字がある。*王有后後宮備具・四庫本は「后後」二字を「後后」に誤倒する。

〔注〕

① 劉次昌 生卒年未詳。齊の孝王將闔の孫で、懿王壽の子。母は紀太后。懿王が即位二十三年にして薨去してのち、齊王を嗣いだ。『史記』五二齊悼惠王世家・『漢書』三八高五王傳に傳がある。『金樓子』の文は『漢書』に近い。

② 爲齊王 『漢書』高五王傳に、「齊孝王之自殺也、景帝聞之、以爲齊首善、以追劫有謀、非其罪也、召立孝王太子壽、是爲懿王。二十三年薨、子厲王次昌嗣」。

③ 其母曰紀太后云云 『漢書』高五王傳に、「其母曰紀太后、太后取其弟紀氏女爲王后、王不愛。紀太后欲其家重寵、令其長女紀翁主入王宮、正其後宮無令得近王、欲令愛紀氏女。王因與其姉翁主姦。齊有宦者徐甲、入事漢皇太后。皇太后有愛女曰脩成君、脩成君非劉氏子、太后憐之。脩成君有女娥、太后欲嫁之於諸侯。宦者甲乃請使齊、必令王上書請娥。皇太后大喜、使甲之

齊。時主父偃知甲之使齊、以取后事、亦因謂甲、「即事成、幸言偃女、願得充王後宮」。甲至齊、風以此事。紀太后怒曰、「王有后、後宮備具。且甲、齊貧人、及爲宦者入事漢、初無補益、乃欲亂吾王家。且主父偃何爲者、乃欲以女充後宮」。甲大窮、還報皇太后曰、「王已願尚娥、然事有所害、恐如燕王」。燕王者、與其子昆弟姦、坐死。故以燕感太后。太后曰、「母復言嫁女齊事」。事浸淫聞於上」。

④ 紀翁主 『漢書』本傳の顏師古注に、「諸王女曰翁主、而紀氏所生、故謂之紀翁主」。

⑤ 漢皇太后云云 皇太后は、景帝の皇后王氏をいう。『史記』四九外戚世家に、「王太后、槐里人、母曰臧兒。臧兒者、故燕王臧荼孫也。臧兒嫁爲槐里王仲妻、生男曰信與兩女。而仲死、臧兒更嫁長陵田氏、生男蚡・勝。臧兒長女嫁爲金王孫婦、生一女矣、而臧兒卜筮之、曰兩女皆當貴。因欲奇兩女、乃奪金氏。金氏怒、不肯予決、乃丙之太子宮。太子幸愛之、生三女一男。男方在身時、王美人夢日入其懷。以告太子、太子曰、「此貴徵也」。未生而孝文帝崩、孝景帝即位、王夫人生男」。その同内容の記事が『漢書』九七上外戚傳上にもある。

⑥ 非劉氏子 『漢書』本傳の顏師古注に、「蘇林曰、皇太后前嫁金氏所生」。

⑦ 主父偃 主父偃（？前一二六）は、齊國臨淄（山東省）の人。縱横家の術を學んで口舌に長け、衛皇后的擁立や、燕王劉定國の淫猥の行爲を暴きたてたことなどに手腕を發揮した。齊

の宰相に任せられると、齊王劉次昌の近親相姦を告發して王を自殺に追いこんだが、その行き過ぎを咎められ、一族皆殺しの刑に處せられた。『史記』一一二平津主父列傳・『漢書』六四上主父偃傳に傳がある。

⑧ 燕王者云云『史記』五一荊燕世家に、「至『燕王澤』孫定國、與父康王姬姦、生子男一人、奪弟妻爲姬、與子女三人姦。定國有所欲誅殺臣肥如令郢人、郢人等告定國、定國使謁者以他法劾捕格殺郢人以滅口。至元朔元年、郢人昆弟復上書具言定國陰事、以此發覺。詔下公卿、皆議曰、『定國禽獸行、亂人倫、逆天、當誅』。上許之。定國自殺、國除爲郡」。

⑨ 寢淫『漢書』本傳の顏師古注に、「寢、古浸字也。寢淫、猶言漸染也」。

39 劉宇壯大、通姦犯法、上以至親弗辜、傳相連坐。久之、事太后、內不相得、太后上書言之。璽書敕諭。元帝崩、宇謂中謁者信等曰、「漢大臣議天子少弱、未能治天下、以爲我知文法、建言欲使我輔佐天子。我見尙書晨夜極勞苦、使我爲之、不能也。今暑熱、縣官年少、持服恐無處所、我危得之」。比至下、宇凡三哭、飲酒食肉、妻妾不離側。後爲妻妾告之、坐削兩縣。

金樓子譯注（十二）（興膳）

劉宇（前漢の東平王）は血氣盛んで、姦人と通じて法を犯したが、天子（元帝）は近親であるため罪せず、輔佐役が巻き添えで罰せられた。しばらくして太后（宣帝の王皇后）に仕えたが、關係がしつくりゆかず、太后は上書してそのことを述べた。天子は敕書で宇を諭した。元帝が崩御すると、宇は中謁者（宦官）の信らに言うには、「漢の大臣たちは天子（成帝）が幼少で、まだ天下を治められないと判斷し、私が法律に通じていると見て、建議して私に天子を輔佐させようとしている。私は尙書が朝から夜まで苦勞を重ねているのしているので、もし私にそれをさせようとしても、とてもできない。今は暑い盛りで、お上は二年少ゆえ、喪に服するにも身の置き所がなく、私は危うく天子になるところだった」。棺が地中に下ろされると、宇は都合三たび哭し、酒を飲み肉を食らって、妻妾はその側を離れなかった。後に妻妾にそのことを告發され、二縣を削られた。

〔校勘〕

*辜・抄本↓罪。 *苦・抄本↓若。 *諸本とも「至」の下に「闕」字があるが、『漢書』に従う。 注⑩参照。 *妻妾・百子本・筆記小説大觀本↓姬胸膺遺其家。

〔注〕

① 劉宇 劉宇（？前二一）は、前漢の宣帝の子で、元帝の異母弟。母は公孫婕妤。甘露二年（前五二）に東平王に立てられた。在位三十三年にして薨去した。諡は思王。

② 劉宇壯大云云 『漢書』八〇宣元六王傳に、「東平思王宇、甘露二年立。元帝即位、就國。壯大、通姦犯法、上以至親、貴弗罪、傳相連坐。久之、事太后、內不相得、太后上書言之、求守杜陵園。上於是遣太中大夫張子蟻、奉璽書敕諭之曰、云云。（中略）宇慙懼、因使者頓首謝死罪、願洒心自改」。

③ 通姦犯法 『漢書』本傳の顔師古注に、「與姦猾交通、好犯法」。太后 王太后（？前一六）をいう。宣帝の皇后。後宮に入つて婕妤となり、霍皇后が廢されてのち、皇后となつて許太子（のちの元帝）の養育に當つた。自分の子はない。元帝の即位後に、皇太后となつた。『漢書』九七上外戚傳上。

⑤ 璽書敕諭 『漢書』本傳の顔師古注に、「約敕而曉告之也」。元帝崩云云 『漢書』本傳に、「宇立二十年、元帝崩。宇謂中謁者信等曰、「漢大臣議天子少弱、未能治天下、以爲我知文法、建欲使我輔佐天子。我見尙書晨夜極苦、使我爲之、不能也。今

暑熱、縣官年少、持服恐無處所、我危得之」。比至下、宇凡三哭、飲酒食肉、妻妾不離側。又姬胸膺故親幸、後疏遠、數歎息呼天。宇聞、斥胸膺爲家人子、掃除永巷、數笞擊之。胸膺私疏宇過失、數令家告之。宇覺知、絞殺胸膺。有司奏請逮捕、有詔削樊・亢父二縣。後三歲、天子詔有司曰、「蓋聞仁以親親、古之道也。前東平王有闕、有司請廢、朕不忍。又請削、朕不敢專。惟王之至親、未嘗忘於心。今聞王改行自新、尊修經術、親近仁人、非法之求、不以奸吏。朕甚嘉焉。傳不云乎、朝過夕改、君子與之。其復前所削縣如故」。

⑦ 縣官 『漢書』本傳の張晏注に、「不敢指斥成帝、謂之縣官也」。⑧ 持服恐無處所 『漢書』本傳の如淳注に、「言不從道、冀如昌邑王也」。昌邑王は廢帝のこと。

⑨ 我危得之 『漢書』本傳の孟康注に、「危、殆也。我殆得爲天子也」。顔師古注に、「危者、猶今之言險不得之也」。

⑩ 比至下 各本とも「至」の下に「闕」字があるが、『漢書』は「比至下」に作り、張晏注に、「下、下棺也」とある。

40 其功業無成者、則司馬穎。^{*①} 初、起軍河朔、三軍畢從。每夜刀戟之端有光若火、壘中井皆有龍像。^② 長沙王旣死、增封穎二十郡、拜丞相。一如魏武九錫故事、乘輿服御皆遷於鄴。其掾步熊私曰、「雖爲太弟、不得嗣也」。穎遂立邦、郊兆於鄴城。及敗、爲頓丘太守馮嵩所執。^③ 穎素爲鄴都所服、

慮爲變、僞稱臺使、賜穎死。穎曰、「我放逐、於今三年、身體手足不見洗沐、取五斗湯來」。其二子號泣、穎叱去。浴訖、散髮東首臥^⑦、命縊之。二子皆死。鄴中爲之悲哀。

功業を達成できなかつたのは、司馬穎（晉の成都王）である。はじめ、司馬穎が軍を黄河の北に起こすと、三軍は盡く従つた。毎晩 刀や戟の先端に火のような光が發して、とりでのどの井戸からも龍の像が出現した。長沙王又が亡くなると、穎は封地を二十郡増やされ、丞相に任じられた。魏の武帝が九錫を受けた故事に全面的にならい、天子の用いる器物をみな「洛陽から」鄴に遷した。穎の掾だつた歩熊は祕かに、「皇太帝ではあつても、皇位は嗣げまい」といつていた。穎はかくて政權を構え、天地を祀る祭壇を鄴城に立てた。「東海王越に」敗れると、頓丘太守馮嵩に捕らえられた。穎はかねがね鄴都で人望を得ていたので、「越は」變事が起こるのを恐れて、天子の使者と僞り、穎に死を賜つた。穎がいうには、「私が放逐されてから、今まで三年の間、身體や手足を洗つたことがない、五斗の湯

を持つてきてくれ」。その二子が號泣すると、穎は叱りつけて追いやつた。沐浴を終えると、頭髮を散らしたまま東向きに枕し、絞め殺すよう命じた。二人の子も死んだ。鄴中の人々がその死を哀しんだ。

〔校勘〕

*穎…抄本↓穎。*於…抄本・四庫本↓于。*東…諸本とも「東」に作るが、『晉書』に従う。注⑦参照。

〔注〕

① 司馬穎 司馬穎（二七九〜三〇六）、字は章度、晉の武帝の第十六子で、惠帝の弟。太康十年（二九九）に成都王に封じられた。八王の亂の渦中で、惠帝を廢して帝位に即いた趙王倫を、齊王冏・長沙王又と協力して滅ぼし、惠帝を復位させた。次いで河間王顥を討つて、丞相となり、さらに鄴に鎮すると、皇太弟となつて朝政に權勢を振るつたが、やがて東海王越に敗れて殺された。『晉書』五九に傳がある。

② 每夜刀戟之端有光若火二句 『晉書』本傳に、「穎次朝歌、每夜矛戟有光若火、其壘井中皆有龍象。『晉書』はもちろん『金樓子』の原據とする書ではないので、以下の注には必ずしも本文の内容と對應しないところがある。

③ 増封穎二十郡云 『晉書』本傳に、「穎既入京師、復旋鎮于

鄴、增封二十郡、拜丞相。河間王顥表穎宜爲儲副、遂廢太子覃、立穎爲皇太弟、丞相如故、制度一依魏武故事、乘輿服御皆遷于鄴。

④ 魏武九錫故事 「九錫」は、天子が大きな功績のあった臣下に賜る九種の禮物。曹操が九錫を受けたことは、『三國志』魏書一武帝紀、建安十八年の項に、「五月丙申、天子使御史大夫郗慮持節策命公爲魏公曰云云」として見える。九錫の内容は、一に「大輅・戎輅各一」、二に「玄牡二駟」、三に「軒縣之樂・六佾之舞」、四に「朱戶」、五に「納陛」、六に「虎賁之士三百人」、七に「鈇鉞各一」、八に「彤弓一・彤矢百・旅弓十」、九に「秬鬯一卣」。

⑤ 其掾步熊私曰云云 『晉書』本傳に、「永興初、左衛將軍陳眵・殿中郎達苞・成輔及長沙故將上官巳等奉大駕討穎、馳檄四方、赴者雲集。軍次安陽、衆十餘萬、鄴中震懼。穎欲走、其掾步熊有道術、曰、「勿動、南軍必敗」。

⑥ 爲頓丘太守馮嵩所執云云 『晉書』本傳に、「值大駕還洛、穎自華陰趨武關、出新野。帝詔鎮南將軍劉弘・南中郎將劉陶捕穎。於是棄母妻、單車與二子廬江王普・中都王廓渡河赴朝歌、收合故將士數百人、欲就公師藩。頓丘太守馮嵩執穎及普・廓送鄴、范陽王虓幽之、而無他意。屬虓暴薨、虓長史劉興見穎、爲鄴都所服、慮爲後患、祕不發喪、僞令人爲臺使、稱詔夜賜穎死。穎謂守者田徽曰、「范陽王亡乎」。徽曰、「不知」。穎曰、「卿年幾」。徽曰、「五十」。穎曰、「知天命不」。徽曰、「不知」。穎曰、「我死之後、天下安乎不安乎。我自放逐、於今三年、身體手足不見

洗沐、取數斗湯來。其、二子號泣、穎救人將去。乃散髮、束首臥、命徽縊之、時年二十八。二子亦死。鄴中哀之」。

⑦ 散髮束首臥 『論語』鄉黨篇に、「疾、君視之、束首加朝服、拖紳」。邢昺疏に、「病者常居北牖下、爲君來視、則暫時遷鄉南牖下、束首、令君得南面而視之。『禮記』玉藻に、「君子之居恆當戶、寢恆束首」。

41 司馬乂忠毅方正。② 成都王穎・河間王顥同攻京師、乂敗績。④ 時東海王越領中書監、慮外難已逼、潛與殿中將士收乂、送金墉城。⑤ 成都軍不彊、恨乂功垂成而敗之、謀共劫乂、更

以距穎。朝廷及東海王越懼難復作、欲遂誅乂。黃門侍郎潘滔曰、「不可、將自有靜之者*」。征西將軍張方遣將郅輔勒兵三千、⑦ 至金墉城收乂、馬負至營、縊之。三軍莫不爲之垂涕。

司馬乂（晉の長沙王）は誠實で意志が強く眞つ直ぐな人物だった。成都王穎と河間王顥がともに京師（洛陽）を攻略したとき、乂は大敗した。當時、東海王越は中書監を兼任していたが、外患が逼ってくるのを慮り、ひそかに殿中にいた將士とともに乂を捕らえ、金墉城に送りこんだ。成

都王の軍は弱く、「殿中の將士たちは」父が功績を擧げるのを目の前にして敗れるのを惜しみ、共に父を奪い返して、穎の攻略を防ごうと謀った。朝廷と東海王越は難事が再び起こるのを恐れて、父を誅殺しようとした。黃門侍郎潘滔がいうには、「いけません。おのずとこの事態を静める者が出るでしょう」。征西將軍張方は配下の將鄧輔に兵三千を率いて派遣し、金墉城に至って父を捕らえ、馬で陣營まで來たところで、縊り殺させた。三軍中で王のために涙を流さぬ者はなかった。

〔校 勘〕

* 靜・抄本・四庫本↓靖。

〔注〕
① 司馬父 司馬父（二七七〜三〇四）、字は士度。晉の武帝の第六子。太康十年（二八九）に長沙王に封ぜられた。永寧元年（三〇一）、齊王司馬冏とともに趙王倫を討ち、一旦廢位された惠帝を復位させ、權勢を握った。しかし翌年には冏と内訌が生じて彼を殺し、さらにその翌年には長沙王穎と東海王越の連合軍の攻略に遭って、殺された。『晉書』五十九に傳がある。

金樓子譯注（十二）（興膳）

② 忠毅方正「忠毅」は誠實で豪毅なさま。『後漢書』八二方術列傳上の謝夷吾傳「奮忠毅之操、躬史魚之節」。「方正」行いがきちんとして正しいこと。『世說新語』に方正篇がある。これに相當する内容は『晉書』本傳になく、司馬父の人となりを描く文として次の一節がある。「又身長七尺五寸、開朗果斷、才力絶人、虚心下士、甚有名譽。」

③ 成都王穎・河間王顥同攻京師『晉書』四惠帝紀に、「太安二年」八月、河間王顥・成都王穎舉兵討長沙王父、帝以父爲大都督、帥軍禦之。」

④ 父敗績云云『晉書』惠帝紀に、「太安二年十一月」癸亥、東海王越執長沙王父、幽於金墉城、尋爲張方所害。また同長沙王父傳に、「父前後破穎軍、斬獲六七萬人、戰久糧乏、城中大饑、雖曰疲弊、將士同心、皆願效死。而父奉上之禮未有虧失、張方以爲未可克、欲還長安。而東海王越慮事不濟、潛與殿中將收父、送金墉城。父表曰、云云（中略）殿中左右恨父功垂成而敗、謀劫出之、更以距穎。越懼難作、欲遂誅父。黃門郎潘滔勸越密告張方、方遣部將鄧輔勒兵三千、就金墉收父、至營、炙而殺之。父冤痛之聲達於左右、三軍莫不爲之垂涕。時年二十八。」

⑤ 金墉城 楊銜之『洛陽伽藍記』一、瑤光寺の項に、「瑤光寺北有承明門、有金墉城、卽魏氏所築。晉永康中、惠帝幽於金墉城。」

⑥ 黃門侍郎潘滔曰云云 潘滔（生卒年未詳）、字は陽仲。滎陽（河南省）の人。東海王越の腹心の臣下で、越の府における「三才」の一人と稱された。「不可、將自有靜之者」に相當す

る文は『晉書』にはないが、『資治通鑑』晉紀七には次のようにある。「城既開、殿中將士見外兵不盛、悔之、更謀劫出又以拒穎。穎懼、欲殺父以絕衆心。黃門侍郎潘滔曰、「不可、將自有靜之者」。乃遣人密告張方。丙寅、方取父於金墉城、至營、炙而殺之、方軍士亦爲之流涕」。

⑦ 征西將軍張方遣將郃輔勒兵三千 張方（？～三〇六）は、河間（河北省）の人。材勇を以て河間王頤の知遇を得て、振武將軍となった。『晉書』六〇本傳に、「東海王越等執父、送于金墉城。方使郃輔取父還營、炙殺之」。

42 司馬越^①少有令名^②。自許昌率荀晞^③及冀州刺史丁劭^④討汲桑^⑤破之^⑥。越拜太傅。先是謠曰、「元超兄弟大落度、上桑打樵爲苟作」。晞亦懼逼、說越曰、「兗州天下之要、公宜自牧」、大治官舍以待越。有大星、頭如箕、長五六丈、起西方流東、行至地。有赤散流光若血、所照皆赤、日中若飛燕者十八日。有流星若箕、自東北、西南行、至地。越請討石勒^⑨、且鎮集兗・豫以援京師。越專擅威權^⑩、圖爲霸業、州郡攜貳、上下崩離、憂懼成疾、薨。

司馬越（晉の東海王）は若いころから令名があった。許

昌（河南省）から荀晞と冀州刺史丁劭を率いて汲桑を討ち、破った。越は太傅に任ぜられた。それより先、童謠に「元超兄弟は大ざっぱ、桑の實落としかは苟任せ」と歌われた。荀晞も不安になり、越にいうには、「兗州は天下の要ですから、殿が自ら治められるべきです」。荀晞は官舎をりっぱに造營して越をもてなした。頭が箕の形をした大きな流星が現われて、五六丈の長さがあり、西から東に流れて行き、地に落ちた。血のように赤い光が發散して、光に照らされた所はみな赤くなり、太陽の中に燕のごとく飛びまわること十八日だった。箕の形をした流星が、東北から現われ、西南に向かつて、地に落ちた。越は石勒を討伐して、さらに兗州・豫州に軍を駐屯させて京師の守りを助けたいと請うた。越は權勢をほしのままに振るって、霸業を爲そうと企てていたが、州郡は離叛し、上下關係は崩壊して、憂いのあまり病にかかり、薨去した。

〔注〕

① 司馬越 司馬越（？～三一））、字は元超。高密王泰の次子。元康元年（二九一）、東海王に封ぜられた。頤頰した河間王

顯・成都王穎を滅ぼし、懷帝の永嘉年間に入ると、政事を委ねられて權力の頂点を極めたが、獨裁的な施政が混亂を招き、自滅した。『晉書』五九に傳がある。

② 少有令名 『晉書』東海王越傳に、「少有令名、謙虛持布衣之操、爲中外所宗。」

③ 苟晞 苟晞（？～三一）字は道將、河內山陽（河南省）の人。一時、東海王越の信任を得て重用されたが、のち離反した。都督青州諸軍事のころは苛酷な軍政を布き、「屠伯」と號された。石勒に捕らわれ、殺された。『晉書』六一に傳がある。

④ 丁劭 丁劭（？～三〇九）字は叔倫、譙國（安徽省）の人。成都王越の下で汲桑の討伐に功績を挙げた。『晉書』九一良吏傳の本傳では名を「紹」に作り、南陽王模傳では「邵」に作る。

⑤ 汲桑 汲桑（？～三〇八）は、魏郡（河北省）の人。もと牧畜民の首領だったが、石勒と結んで兵を挙げ、鄴を陥れた。東海王越の麾下の苟晞等に敗れ、殺された。事跡は『晉書』苟晞傳、『晉書』載記四石勒傳に見える。

⑥ 自許昌率苟晞及冀州刺史丁劭討汲桑二句 『晉書』本傳に「永嘉初、自許昌率苟晞及冀州刺史丁劭討汲桑、破之。越還于許、長史潘滔說之曰、『兗州天下樞要、公宜自牧。』乃轉苟晞爲青州刺史、由是與晞有隙。『晉書』六一苟晞傳に、「初、東海王越以晞復其讎恥、甚德之、引升堂、結爲兄弟。越司馬潘滔等說曰、『兗州要衝、魏武以之輔相漢室。苟晞有大志、非純臣、久令處之、則患生心腹矣。若遷于青州、厚其名號、晞必悅。公

自牧兗州、經緯諸夏、藩衛本朝、此所謂謀之於未有、爲之於未亂也。越以爲然、乃遷晞征東大將軍・開府儀同三司、加侍中・假節・都督青州諸軍事、領青州刺史、進爲郡公。『金樓子』の記事とは符合しないところがある。

⑦ 先是謠曰云云 『宋書』三一五行志二詩妖に、「司馬越還洛、有童謠曰、『洛中大鼠長尺二、若不蚤去大狗至。』及苟晞將破汲桑、又謠曰、『元超兄弟大落度、上桑打樞爲苟作。』由是越惡苟奪其兗州、隙難遂構。『晉書』二八五行志中詩妖にもほぼ同じ記事がある。「落度」は音ラク・タクで、疊韻の語。「落拓」「落托」に同じで、ものごとにとらぬさま、落ちぶれるさまの相い反する兩義があるが、前者の意に解しておく。「樞」は桑の實で、汲桑討伐の成果は苟晞のものになったという寓意を籠める。

⑧ 有大星云云 『晉書』五懷帝紀に、「永嘉元年」九月戊申、苟晞又破汲桑、陷其九壘。辛亥、有大星如日、小者如斗、自西方流於東北、天盡赤、俄有聲如雷。『宋書』五行志五に、「永嘉」五年三月庚申、日散、光如血、下流、所照皆赤、日中有若飛鷲者。また『晉書』天文志中に、「永嘉」五年三月庚申、日散、如血、光下流、所照皆赤。日中有若飛鷲者。唐の瞿曇悉達『唐開元占經』五日變色に、「日赤如血、其國君死、赤始末緒、將軍死於野。注に王隱『晉書』を引いていう。「東海王越自陽成帥甲士四萬、京邑多徙、次許昌、以鳴崇爲兵司馬、越領豫州牧。三月四日、日有赤散流、其光若血下流、其光之所照

皆赤。日中有若飛鷁者七。八十九日、越薨于項也。

⑨ 越請討石勒 『晉書』懷帝紀に、「永嘉四年十月」壬寅、石勒圍倉垣、陳留內史王讚擊破之、勒走河北。(中略)京師饑。

東海王越羽檄徵天下兵、帝謂使者曰、『爲我語諸征鎮、若今日尚可救、後則無逮矣』。時莫有至者。石勒陷襄城、太守崔曠遇害、遂至宛。王遣鮮卑文鴛帥騎救之、勒退。浚又遣別將王申始討勒于汶石津、大破之。十一月甲戌、東海王越帥衆出許昌、以行臺自隨。(中略)越軍次項、自領豫州牧、以太尉王衍爲軍司。『晉書』本傳に、「越自誅王延等、大失衆望、而多有猜嫌。散騎侍郎高韜有憂國之言、越誣以訕謗時政害之、而不自安。乃戎服入見、請討石勒、且鎮集兗豫以援京師。帝曰、『今逆虜侵逼郊畿、王室蠱蠱、莫有固心。朝廷社稷、倚賴於公、豈可遠出以孤根本』。對曰、『臣今率衆邀賊、勢必滅之。賊滅則不逞消殄、已東諸州職貢流通。此所以宣暢國威、藩屏之宜也。若端坐京華以失機會、則覺弊日滋、所憂逾重』。遂行」。

⑩ 越專擅威權云云 『晉書』本傳に、「越專擅威權、圖爲霸業、朝賢素望、選爲佐吏、名將勁卒、充于己府、不臣之迹、四海所知。而公私營之、所在寇亂、州郡攜貳、上下崩離、禍結疊深、遂憂懼成疾。永嘉五年、薨于項。祕不發喪」。

43 劉餘^①* 封爲淮陽王。吳楚反破後、徙王魯。好治宮室苑囿狗馬。季年好音、口吃難言。初壞孔子舊宅以廣其宮、聞

鍾磬琴瑟之聲、遂不敢壞。⑤ 於其壁中得古文經傳。

劉餘(前漢の魯王)は淮陽王に封ぜられた。吳楚の叛亂が平定されてのち、魯王に國替えとなった。宮殿の建築、庭園の造營、犬馬の飼育を好んだ。晩年には音樂を愛好したが、屹りで話しが苦手だった。以前、孔子の舊宅をとり壊して宮殿を廣げようとしたが、鍾磬や琴瑟の音が聞こえてきて、壊すのを止めた。その壁中から古文で書かれた經傳が見つかった。

〔校勘〕

*之抄本・百子本・筆記小説大觀本↓初。『漢書』景十三王傳には之の字無し。

〔注〕

① 劉餘 劉餘(??前二二八)は、前漢の景帝の子。初め淮陽王に立てられ、のち魯王に徙った。諡は恭王。『漢書』五十三景十三王傳に傳がある。

② 封爲淮陽王 『漢書』本傳に、「魯恭王餘以孝景前二年立爲淮陽王、吳楚反破後、以孝景前三年徙王魯。好治宮室苑囿狗馬、

季年好音、不喜辭。爲人口訖難言。恭王初好治宮室、壞孔子舊宅以廣其宮、聞鐘磬琴瑟之聲、遂不敢復壞、於其壁中得古文經傳。

③ 季年『漢書』の顏師古注に、「季年、末年也。」

④ 初壞孔子舊宅以廣其宮云云。『漢書』藝文志に、「古文尙書者、出孔子壁中。武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尙書及禮記・論語・孝經凡數十篇、皆古字也。共王往入其宅、聞鼓琴、瑟、鍾磬之音、於是懼、乃止不壞。」

⑤ 遂不敢壞『漢書』は「遂不敢復壞」に作る。注②参照。

44 劉京^①性恭孝^②、好經學。京都莒、好宮室、窮極伎巧、殿館壁帶皆飾以金銀。數上詩賦頌德、帝嘉美之。京國中有城陽景王祀^③、吏民奉祠^④。神數下、言宮中多不便。乃復徙宮開陽。

劉京（後漢の琅邪王）はつつしみ深く孝行な性格で、經學を好んだ。京は莒（山東省莒縣）に都を置き、宮殿の修築を好んで、技巧の限りを盡くし、殿壁の横木はみな金銀で飾りたてた。しばしば詩賦を奉って天子の徳を頌めたため、帝はそれを嘉し愛でた。京の國には城陽景王の祠廟が

金樓子譯注（十二）（興膳）

あり、吏民はその祭祀を行なっていた。神がしばしば降臨して、宮殿にはいろいろ不便なところが多いと告げた。そこで宮殿を開陽（山東省臨沂の北）に移した。

〔校勘〕

*祀・抄本↓祠。『後漢書』光武十王傳も「祠」に作る。注②参照。

〔注〕

① 劉京、劉京（？〜八一）は、後漢の光武帝の子。母は光烈陰皇后。建武十五年（一八九）に琅邪公に封ぜられ、十七年に爵位を王に進められた。諡は孝王。『後漢書』四二光武十王列傳に傳がある。

② 性恭孝云云。『後漢書』本傳に、「京性恭孝、好經學、顯宗尤愛幸、賞賜恩寵殊異、莫與爲比。永平二年、以太山之蓋・南武陽・華、東萊之昌陽・盧鄉・東牟六縣益琅邪。五年、乃就國。光烈皇后崩、帝悉以太后遺金寶財物賜京。京都莒、好修宮室、窮極伎巧、殿館壁帶皆飾以金銀。數上詩賦頌德、帝嘉美、下之史官。京國中有城陽景王祠、吏人奉祠。神數下、言宮中多不便。京上書願徙宮開陽、以華・蓋・南武陽・厚丘・贛榆五縣易東海之開陽・臨沂、肅宗許之。立三十一年薨、葬東海即丘廣平亭、有詔割亭屬開陽。」

③ 壁帶『後漢書』的李賢注に、「壁帶、壁中之横木也。以金銀

爲釘、飾其上。」

④ 城陽景王祀 城陽景王は、前漢の劉章（？～前一七七）で、齊の悼惠王劉肥の子、高祖劉邦の孫に當たる。呂后の死後、呂氏一族の叛亂を平定し、文帝を擁立するのに功績があった。

『史記』五二齊悼惠王世家に傳がある。『後漢書』一一劉盆子傳に、「軍中常有齊巫鼓舞祠城陽景王、以求福助。巫狂言景王大怒、曰、『當爲縣官、何故爲賊』。有笑巫者輒病、軍中驚動。李賢注に、「以其定諸呂、安社稷、故郡國多爲立祠焉。盆子承其後、故軍中祠之」。また、「縣官、謂天子也」。

⑤ 開陽 『後漢書』本傳の李賢注に、「開陽、縣、屬東海郡、故城在今沂州臨沂縣北」。

45 司馬道子^①於府第內築土山、穿池沼、樹竹木、用功數十百萬。又使宮人爲酒肆、酤賣於水側、道子與親幸乘船、就其家飲宴、若在市肆、以爲笑樂。子元顯時十六、爲政苛刻、生殺自己、矜豪奢侈。發東土諸郡、免奴爲客者、號曰樂屬、移置京師、以充兵役。道子既失威權、遂終日昏醉、不復厝意、政無大小、一委元顯。元顯大治兵器、聚徒十萬。百姓饑饉、人情危懼、而道子・元顯置酒作樂、竟以此敗。

司馬道子（東晉の會稽王）は屋敷内に築山をしつらえ、

池沼を穿ち、竹や木を植えて、費やした費用は數十萬から百萬にも上った。また宮女に酒場を開かせ、水邊で酒を賣らせて、道子は親しい仲間と船で乗りこみ、酒場で酒宴を開き、あたかも市場におけるように、笑い楽しんだ。息子の元顯は時に十六歳で、その爲政は苛刻で、生かすも殺すも自分次第、豪儀を誇り奢侈を盡くした。東土の諸郡の元來は奴隸で客戸の身分になっている者を、「樂屬」と稱して、京師に移住させ、兵役に充てた。道子は權勢を失墜すると、終日酔いつぶれて、政事に心を注がなくなり、大事も小事も、すべて元顯任せにした。元顯は大いに軍備を増強して、兵十萬を集めた。民衆は饑えに苦しみ、世情は事態を危惧したが、道子・元顯父子は酒盛りにうつつを抜かし、ついに破滅に至った。

〔校勘〕

*東土・諸本とも「土」字を缺くが、『晉書』簡文三子傳により補う。注③参照。

〔注〕

① 司馬道子 司馬道子（三六五―四〇三）は、東晉の簡文帝の第五子で、孝文帝の弟。母は李夫人。初め琅邪王に封ぜられ、十歳にして會稽王に改封された。やがて兵權を掌握して、子の元顯と共に皇族中の實力者となったが、孫恩の亂に直面して無策のまま、桓玄の蜂起に逢って三十九歳で自滅した。諡は文孝王。『晉書』六四簡文三子傳に傳がある。

② 於府第內築土山云云 『晉書』本傳に、「嬖人趙牙出自優倡、茹千秋本錢塘捕賊吏、因賂諂進、道子以牙爲魏郡太守、千秋驃騎諮議參軍。牙爲道子開東第、築山穿池、列樹竹木、功用鉅萬。道子使宮人爲酒肆、沽賣於水側、與親昵乘船就之飲宴、以爲笑樂。帝嘗幸其宅、謂道子曰、『府內有山、因得遊囑、甚善也。然修飾太過、非示天下以儉』。道子無以對、唯唯而已、左右侍臣莫敢有言。帝還宮、道子謂牙曰、『上若知山是板築所作、爾必死矣』。牙曰、『公在、牙何敢死』。營造彌甚。

③ 子元顯時十六云云 『晉書』本傳に、「道子世子元顯、時年十六、爲侍中、心惡『王』恭、請道子討之。乃拜元顯爲征虜將軍、其先衛府及徐州文武悉配之。（中略）會道子有疾、加以昏醉、元顯知朝望去之、謀奪其權、諷天子解道子揚州・司徒、而道子不之覺。元顯自以少年頓居權重、慮有譏議、於是以琅邪王領司徒、元顯自爲揚州刺史。既而道子酒醒、方知去職、於是大怒、而無如之何。（中略）元顯性苛刻、生殺自己、法順屢諫、不納。又發東土諸郡免奴爲客者、號曰樂屬、移置京師、以充兵役、東

金樓子譯注（十二）（興膳）

土囂然、人不堪命、天下苦之矣。既而孫恩乘釁作亂、加道子黃鉞、元顯爲中軍以討之、又加元顯錄尚書事。然道子更爲長夜之飲、政無大小、一委元顯。時謂道子爲東錄、元顯爲西錄。西府車騎填湊、東第門下可設雀羅矣。

46 劉休祐^①在荊州、哀刻在所、多營財貨。以短錢^③一百賦民、田登、既就求白米一斛、米粒皆令潔白、若有破折者、悉刪^{*}揀不受。民間糴此米、一斗一百。至時又不受米、計米責錢。百姓嗷然、不復堪命。性狼戾、前後忤上非一。且慮將來難^{*}制、遂方便殺之。諡刺王。^④

劉休祐（宋の晉平王）は荊州の刺史のとき、至る所で民財を奪い取り、盛んに財貨を貯えた。「短錢」百枚を民に貸しつけ、收穫の際には、白米一斛を取りたてて、米粒はみなまつ白でなければならず、もし缺けたり割れたりしたものがあれば、すべて除き取って受け入れなかった。民間でこの米を賣り出すときには、一斗に百錢の値がついた。「休祐は」米が届いても受け取らず、米を量って「それに相當する」錢を求めた。民衆は悲鳴を上げ、とてもその命

に耐えられなかった。休祐はねじけた性格で、お上(明帝)に逆らうことが一再ならずあった。「お上は」將來手に負えなくなるのを慮り、機會を設けて殺した。諡を刺王という。

〔校勘〕

*在所：四庫本↓所在。「宋書」文九王傳も同じ。*潔：「宋書」↓徹。*揀：「宋書」↓簡。*斗：「宋書」↓升。*計：「宋書」↓評。*性狼戾：「宋書」↓狼戾強梁。*且慮：「宋書」は下に「休祐」二字がある。*遂：「宋書」↓欲。*殺：「宋書」↓除。

〔注〕

- ① 劉休祐 劉休祐(四四五～四七二)は、宋の文帝の第十三子。母は邢美人。初め山陽王に封ぜられ、のち晉平王に改封された。また荊州刺史に任ぜられた。兄明帝にその性格を悪まれて暗殺された。諡は刺王。「宋書」七二文九王傳・「南史」一四宋王室及諸王傳に傳がある。
- ② 在荊州云云 「宋書」本傳に、「休祐素無才能、強梁自用。大明之世、年尙少、未得自專、至是貪淫、好財色。在荊州、哀刻所在、多營財貨。以短錢一百賦民、田登、就求白米一斛、米粒皆令徹白、若有破折者、悉刪簡不受。民間糶此米、一升一百。

至時又不受米、評米責錢。凡諸求利、皆悉如此、百姓嗷然、不堪命。」「南史」本傳にもほぼ同内容の記事がある。

- ③ 短錢 百錢未滿の金額を以て百錢とする制度。たとえば七十錢を百錢として他人に貸與し、返還時には滿額の百錢を求めるとすれば、差額三十錢の利益を得ることになる。「短陌」ともいい、「長錢」「足陌」と對應する。「抱朴子」微旨篇に、「取人長錢、還人短陌」。後の資料ながら、「金史」食貨志に、「時民間以八十爲陌、謂之短錢、官用足陌、謂之長錢」。

- ④ 性狼戾 「宋書」本傳に、「休祐狼戾強梁、前後忤上非一。在荊州時、左右苑景達善彈棊、上召之、休祐留不遣。上怒、詰責之曰、「汝剛戾如此、豈爲下之義」。積不能平。且慮休祐將來難制、欲方便除之。七年二月、車駕於巖山射雉、有一雉不肯入場、日暮將反、令休祐射之。語云、「不得雉、勿歸」。休祐時從在黃麾內、左右從者竝在部伍後、休祐便馳去、上遣左右數人隨之。上既還、前驅清道、休祐人從悉分散、不復相得、上因遣壽寂之等諸將追之。日已欲闌、與休祐相及、逼令墜馬。休祐素勇壯有氣力、奮拳左右排擊、莫得近。有一人後引陰、因頓地、即共毆拉殺之。乃遣人馳白上、行唱、「驃騎落馬」。上曰、「驃騎體大落馬殊不易」。即遣御醫絡驛相係。頃之、休祐左右人至、久已絕。去車脚、輿以還第、時年二十七。追贈司空・持節・侍中・都督・刺史如故、給班劍二十人、三望車一乘。時巴陵王休若在建陵、其日即馳信報休若曰、「吾與驃騎南山射雉、驃騎馬驚、與直閣夏文秀馬相踰、文秀墮地、驃騎失韉、馬驚、觸松樹墮地、

落剛中、時頓悶、不識人、故馳報弟」。其年五月、追免休祜爲庶人」。

47 劉義康性好吏職、銳意文案、是非莫不精盡。爲侍中・司徒・錄尚書事、既專總朝政、生殺大事、皆以錄命斷之。凡所陳奏、入無不可、方伯以下、並委義康授用。由是朝野輻湊、勢傾天下。義康亦自強不息、無有懈倦。府門每旦常有數百乘車、雖復位卑人微、皆被引接。又聰識過人、一聞必記、嘗所暫遇、終身不忘。稠人廣坐、每標題所憶、以示聰明、物議益以此推服之。愛惜官爵、未嘗以階級私人。凡朝士有才用者、皆引入己府、無施及忤旨、卽度爲臺官、自下樂爲竭力、「不敢欺負」。私置僮六千餘人、不以言臺。時四方獻饋、皆以上品薦義康、而以次者供御。上嘗冬月噉柑、歎其形味竝劣。義康在坐、曰、「今年柑殊有佳者」。遣人還東府取柑、大供御者三寸。因此見廢。

劉義康（宋の彭城王）は行政の職務が好きで、公文書の文案に意を注ぎ、その是非を精細に検討した。侍

金樓子譯注（十二）（興膳）

中・司徒・錄尚書事となつて、朝政を總覽するようになる。と、生殺の大事は、みな錄尚書事の命によつて決裁された。彼が奏上すること、聞き入れられぬものはなく、地方長官以下の任命は、みな人事權を任されていた。かくて朝廷の内外から人氣が集まり、その權勢は天下を傾けるほどだった。義康はまたたゆまず自己努力を續け、倦むことがなかった。役所の門前には毎朝いつも數百臺の車が並び、身分や地位の低い人でも、すべて引見された。また拔群の記憶力を持ち、一度耳にしたことは必ず覚えていて、ちよつと出會つた人でも、終生忘れなかった。大勢の人の集まる中で、記憶するところを指し示して、聰明さを誇示し、世間の評判はますます高まつた。官位や爵位を尊重し、決して位階を私物化しなかつた。朝廷で才覺のある者がいれば、みな自分の王府に引き入れ、能力を伸ばせなかつたり意に叶わぬ者は、政府の官に着けてやり、謙虚に喜んで力を盡くして、「裏切ることがなかつた」。私的に僮僕六千人餘りを置いていたが、そのことを朝廷には報告していなかつた。各地から献上品があるときには、みな最上のものを義康に

獻じ、それに次ぐものを帝（文帝）に獻じた。帝がかつて冬に蜜柑を食べ、その形も味も劣るのをこぼした。その場にいた義康が「今年の蜜柑にはとても良いものがあります」といつて、使いを遣つて東府から蜜柑を取つて來させると、帝への献上品よりも三寸も大きかった。それがもとで王を廢された。

〔校勘〕

*身・抄本・四庫本↓生。『宋書』武二王傳は「生」、『南史』宋宗室及諸王傳は「身」に作る。*益・筆記小説大觀本↓亦。*冬月・抄本↓月冬。

〔注〕

① 劉義康 劉義康（四〇九―四五二）は、宋の武帝劉裕の第四子で、文帝の異母弟。母は王修容。小字は車子。十二歳で彭城王に封ぜられ、文帝の治下で大權を握つてときめいたが、范曄等が彼を帝に立てようとする密謀が露見して、身分を庶人に落とされ、のち殺された。『宋書』六八武二王傳・『南史』一三宋宗室及諸王傳上に傳がある。

② 性好吏職云云 『宋書』本傳に、「義康性好吏職、銳意文案、糾別是非、莫不精盡。既專總朝權、事決自己、生殺大事、以錄

命斷之。凡所陳奏、入無不可、方伯以下、竝委義康授用、由是朝野輻輳、勢傾天下。義康亦自強不息、無有懈倦。府門每旦常有數百乘車、雖復位卑人微、皆被引接。又聰識過人、一聞必記、常所暫遇、終生不忘。稠人廣席、每標所憶以示聰明、人物益以此推服之。愛惜官爵、未嘗以階級私人、凡朝士有才用者、皆引入己府、無施及忤旨、即度爲臺官。自下樂爲竭力、不敢欺負。『南史』本傳にもほぼ同内容の記事がある。

③ 爲侍中・司徒・錄尚書事 『宋書』本傳に、「元嘉」六年、司徒王弘表義康宜還入輔、徵侍中・都督揚・南徐・兗三州諸軍事、司徒・錄尚書事、領平北將軍・南徐州刺史、持節如故。二府並置佐領兵、與王弘共輔朝政。弘既多疾、且每事推謙、自是内外衆務、一斷之義康」。錄尚書事は、總錄尚書省事の略で、行政の全權を握る最高の權力者。

④ 自強不息 「易」乾卦の象傳に、「天行健、君子以自強不息」。物議 『宋書』『南史』の本傳は「人物」に作る。注②參照。

⑤ 不敢欺負 『宋書』本傳により補う。注②參照。

⑥ 私置僅六千餘人 『宋書』本傳に、「私置僮部六千餘人、不以言臺。四方獻饋、皆以上品薦義康、而以次者供御。上嘗冬月噉甘、歎其形味竝劣。義康在坐曰、『今年甘殊有佳者』。遣人還東府取甘、大供御者三寸。『南史』本傳にもほぼ同文の記事がある。ただし『宋書』が「僮部」に作る個所は、『南史』では「金樓子」と同じく「部」字を缺く。

⑧ 因此見廢 『金樓子』では蜜柑の事件が劉義康の蹉跎の原因

となったように書かれているが、事實ではなく、注①に記したように、范曄等が義康を帝に推戴しようとした事件が発生したためである。「宋書」五文帝紀に、「元嘉二十二年」十二月乙未、太子詹事范曄謀反、及黨與皆伏誅。丁酉、免大將軍彭城王義康爲庶人。また本傳に、「元嘉」二十二年、太子詹事范曄等謀反、事逮義康、事在曄傳（中略）二十八年正月、遣中書舍人嚴龍齋藥賜死。義康不肯服藥、曰、「佛教自殺不復得人身、便隨宜見處分」。乃以被掄殺之、時年四十三、以侯禮葬安成。

48 劉義恭鎮彭城、伐魯郡孔子舊廟柏樹二十四株、經歷漢・晉、其大連抱者^③二株先倒折、土人崇敬、莫之敢犯。義恭悉遣人伐取之、父老莫不歎息。義恭性嗜不恆^④、與時移變、自始至終、屢遷第宅。與人游款、意好亦多不終。而奢侈無度、不愛財寶、左右親幸者、一日先與一二百萬、小有忤旨、輒追奪之。大明時、資供豐厚、而用常不足、賒市百姓物、無錢可還、民有通辭求錢者、輒題後作原字。善騎馬、解音樂、游行或三五百里、東至吳郡、登虎丘山、又登無錫烏山以望太湖。

劉義恭（宋の江夏王）は彭城（江蘇省徐州）に鎮したとき、

金樓子譯注（十二）（興膳）

魯郡の孔子の舊廟にあつた柏樹二十四株を斬つたが、それらは漢から晉の時代を経たもので、周りが一抱えもある大きな二株は先に倒れていて、土地の人々に崇敬されており誰もそれに手出しをしようとはしなかつた。義恭は人を遣つて木を伐採してしまつたので、故老たちは誰もが歎息した。義恭は移り氣な性格で、好みが時によつて變わり、生涯の初めから終わりまで、しばしば邸宅を遷つた。人との交遊にしても、親しさが長く續かないことが多かつた。さらに贅澤ぶりは度を過ごして、財寶を大切にせず、側近のお氣に入り、あるとき一二百萬錢をぼんと與えておきながら、少しでも氣に食わぬことがあれば、後で取り上げてしまつた。大明年間（四五七〜四六四）に、義恭の資産は豊かなものだったが、使うお金がいつも足らず、民の持ち物を後拂いで買つて、返済すべき金銭がないので、民が書面で支拂いを求めると、いつも題の後に「原」（免除する）の字を書きつけた。騎馬を善くし、音樂を解して、出かける時には三百里から五百里にも及び、東では吳郡（蘇州）に至つて、虎丘山に登り、また無錫の烏山に登つ

て太湖を遠望した。

〔校勘〕

*歎・四庫本↓嘆。*先・抄本・百子本・筆記小説大觀本↓乞。
*旨・百子本・筆記小説大觀本↓意。*用常・四庫本↓常用。*
姓・抄本↓性。*丘・抄本・四庫本↓邱

〔注〕

- ① 劉義恭 劉義恭（四一三〜四六五）は、宋の武帝の第五子で、文帝と彭城王劉義康の異母弟。母は袁美人。聰明さと秀でた容姿で武帝の寵愛を得た。文帝の初年、江夏王に封ぜられ、劉義康の失脚後は侍中・司徒・録尚書事に任ぜられて、文帝に信任された。しかし、晩年には、柳元景と共に廢帝子業の廢位を謀ったことにより、殺された。著書に『要記』五卷がある。『宋書』六一・武三王傳・『南史』一三宋宗室及諸王傳上に傳がある。
- ② 鎮彭城云云 『宋書』本傳に、「元嘉」二十七年春、索虜（北魏）寇豫州、太祖因此欲開定河洛。其秋、以義恭總統羣帥、出鎮彭城。解國子祭酒。虜遂深入、徑至瓜步、義恭與世祖閉彭城自守。二十八年春、虜退走、自彭城北過、義恭震懼不敢追。（中略）魯郡孔子舊庭有栢樹二十四株、經歷漢・晉、其大連抱有二株先折倒、土人崇敬、莫之敢犯、義恭悉遣人伐取、父老莫不歎息。『南史』本傳にもほぼ同内容の記事がある。
- ③ 大連抱 漢の司馬相如「上林賦」（『史記』一一七・『漢書』

五七の司馬相如傳・『文選』八）に、天子の上林の樹木のさまを描いて、「長千仞、大連抱」。『漢書』の顏師古注に、「八尺曰。連抱者、言非一人所抱」。

④ 義恭性嗜不恆云云 『宋書』本傳に、「義恭性嗜不恆、日時移變、自始至終、屢遷第宅。與人遊歎、意好亦多不終。而奢侈無度、不愛財寶、左右親幸者、一日乞與、或至一二百萬、小有忤意、輒追奪之。大明時、資供豐厚、而用常不足、賒市百姓物、無錢可還、民有通辭求錢者、輒題後作原字。善騎馬、解音律、遊行或三五百里、世祖恣其所之。東至吳郡、登虎丘山、又登無錫縣烏山以望太湖。』『南史』本傳にもほぼ同じ。

49 劉義宣^①在荆鎮十年^②、兵彊財富、既首創大義、誅元凶劼^③、威名蓋天下、凡所求欲、無不畢從。朝廷所下制度、意所不同者、一不遵奉。嘗獻世祖酒、先自酌飲、封送所餘、其不識大體也如此。

劉義宣（宋の南郡王）は荊州に鎮すること十年、軍備を強化し財産を蓄え、率先して大義を掲げて、元凶の劉劼を誅殺し、その威名は天下に徧く、求めようとすることで、意にかなわぬものはなかった。朝廷が下した制度に、意に

そぐわぬところがあれば、全く従わなかった。かつて世祖（孝武帝）に酒を献上する時には、まず自分が飲んで、その飲み残しに封をして送るありさまで、事理の本質をわきまえぬさまはかくの通りだった。

〔注〕

- ① 劉義宣 劉義宣（四一五〜四五四）は、宋の武帝の第六子。文帝及び劉義康・劉義恭の異母弟。母は孫美人。文帝の下で竟陵王、次いで南譙王に封ぜられた。文帝の太子劭が父を殺して即位すると、率先してその討伐に乗りだし、その功績によって絶大な地位を築き、孝武帝の即位後に南郡王に改封された。しかし江州刺史臧質と共謀して叛亂を企てたものの、失敗に終わり、殺された。『宋書』六八武二王傳・『南史』一三宋宗室及諸王傳に傳がある。
- ② 在荆鎮十年云云 『宋書』本傳に、「於是改授都督荆・湘・雍・益・梁・寧・南北秦八州諸軍事・荆・湘二州刺史、持節・侍中・丞相如故。（中略）義宣在鎮十年、兵強財富。既首創大義、威名著天下、凡所求欲、無不必從。朝廷所下制度、意所不同者、一不遵承。嘗獻世祖酒、先自酌飲、封送所餘、其不識大體如此」。『南史』本傳にもほぼ同内容の記事がある。
- ③ 元凶劭 劉劭（四二六〜四五三）、字は休遠。宋の文帝の長子で、六歳にして皇太子に立てられた。元嘉三十年、父文帝を

弑して自ら立ち、太初と改元したが、ほどなく弟の武陵王劉駿等に滅ぼされ、殺された。「元凶」と稱される。『宋書』九九二凶傳・『南史』一四宋宗室及諸王傳に傳がある。

爲臧質所説、俄舉兵反。以第八子愔爲輔國將軍・荊州刺史、左司馬竺超民輔之。王玄謨舟師頓梁山洲内、東西兩岸爲卻月城、營柵甚固。撫軍柳元景據姑熟。臧質徑入梁山、去玄謨一里許結營。義宣屯蕪湖。西南風猛、質乘風從流攻玄謨西壘、冗從僕射胡子友等戰失利、棄壘渡、就玄謨。義宣至梁山、步軍東岸攻玄謨。玄謨分遣游擊將軍垣護之・竟陵太守薛安都出壘奮擊、大破之。軍人一時投水。護之因風縱火、焚其舟乘、風勢猛、煙焰覆江、縱兵攻之、大衆奔潰。

臧質に説得されて、俄かに叛亂の兵を擧げた。第八子の愔を輔國將軍・荊州刺史とし、左司馬竺暢民を輔佐とした。王玄謨の水軍が梁山（安徽省）の洲内に駐屯していて、東西の兩岸を半月状の砦とし、防御態勢はきわめて堅固だった。撫軍將軍柳元景は姑熟（安徽省）を據點としていた。

臧質はまっ直ぐ梁山に入り、王玄謨から一里ほど離れたところに陣を構え、劉義宣は蕪湖（安徽省）に陣取った。西南の風が激しく吹いたので、臧質は風に乗流れに從つて、王玄謨の西壘を攻撃したが、冗從僕射の胡子反は戦況が不利になると、壘を放棄して川を渡り、王玄謨方に就いた。

劉義宣は梁山に至るや、歩兵で東岸から王玄謨を攻撃した。王玄謨は游擊將軍垣護之と竟陵太守薛安都を二手に分けて壘から出て反撃し、大勝利を収めた。兵士は一齊に川に飛びこんだ。垣護之は風を利用して火を放つと、相手の舟や車を焼き拂い、激しい風勢に乗つて、煙火は水面を覆い、その間に兵を放つて攻略したので、劉義宣軍の兵は壊滅した。

〔校勘〕

*卻：抄本・四庫本↓却。卻は却の本字。*煙：抄本↓烟。

〔注〕

④ 臧質 臧質（四〇〇～四五四）、字は含文、東莞莒（山東省）の人。文帝の治世下で北魏の侵寇を防御したこと功績を挙げ、また文帝の太子劼が文帝を殺して即位したときには、孝武帝に從つて劼を討伐し、その功により江州刺史に任ぜられた。

劉義宣を擁立しようとしたが、失敗し、殺された。『宋書』七四・『南史』一八に傳がある。

⑤ 爲臧質所説云云 『宋書』本傳に、「初、臧質陰有異志、以義宣凡弱、易可以傾移、欲假手爲亂、以成其姦。自襄陽往江陵見義宣、便盡禮、事在質傳。及至江州、每密信説義宣、以爲『有大才、負大功、挾震主之威、自古尠有全者、宜在人前、蚤有處分。且萬姓莫不係心於公、整衆入朝、內外孰不欣戴。不爾一旦受禍、悔無所及』。義宣陰納質言、而世祖聞庭無禮、與義宣諸女淫亂、義宣因此發怒、密治舟甲、克孝建元年初冬舉兵。（中略）義宣移檄諸州郡、加進號位。遣參軍劉謨之・尹周之等率軍下就臧質。雍州刺史朱脩之起兵奉順。義宣二月十一日率衆十萬發自江津、舳艫數百里。是日大風、船垂覆沒、僅得入中夏口。以第八子愔爲輔國將軍、留鎮江陵、遣魯秀・朱曇詔萬餘人北討朱脩之。秀初至江陵、見義宣、既出、拊膺曰、『阿兄誤人事、乃與癡人共作戰、今年敗矣』。義宣至尋陽、與質俱下、質爲前鋒。至鵲頭、聞徐遣寶敗、魯爽於小峴授首、相視失色。世祖使鎮北大將軍沈慶之送爽首示義宣、并與書、『僕荷任一方、而覺生所統。近聊率輕師、指往翦撲、軍鋒裁交、賊爽授首。公情契異常、或欲相見、及其可識、指送相呈』。義宣・質竝駭懼。『南史』本傳にもほぼ同内容の記事がある。以下の部分についても同じ。

⑥ 王玄謨 王玄謨（三八七？～四六八）、字は彥德、太原祁（山西省）の人。諸本とも「玄」を「元」に作るのは清諱を避

けたもので、『宋書』『南史』により改める。武陵王劉駿（のちの孝武帝）を助けて「元凶」劉劭の討伐に貢献した。また本章で記される劉義宣と臧質の叛亂を平定したことにより、孝武帝の信任を高めた。官位は左光祿大夫・開府儀同三司に至った。諡は莊公。『宋書』七六・『南史』一六一に傳がある。

⑦ 舟師頓梁山洲内云云 『宋書』本傳に、「上先遣豫州刺史王玄謨、舟師頓梁山洲内、東西兩岸爲卻月城、營柵甚固。義宣屢與玄謨書、要令降、玄謨書報曰、（中略）撫軍柳元景據姑熟爲大統、偏帥鄭琨・武念戍南浦。質選入梁山、去玄謨一里許結營、義宣屯蕪湖。五月十九日、西南風猛、質乘風順流攻玄謨西壘、元從僕射胡子友等戰失利、棄壘渡就玄謨。質又遣將龐法起數千兵從洲外趨南浦、仍使自後掩玄謨。與琨・念相遇、法起戰大敗、赴水死略盡。二十一日、義宣至梁山、質上出軍東岸攻玄謨。玄謨分遣游擊將軍垣護之・竟陵太守薛安都等出壘奮擊、大敗質軍、軍人一時投水。護之等因風縱火、焚其舟乘、風勢猛盛、烟爛覆江。義宣時屯西岸、延火燒營殆盡。諸將乘風火之勢、縱兵攻之、衆一時奔潰。」「梁山」は、『太平寰宇記』一二四、淮南道二和州歷陽縣に、「梁山、在縣南七十里。俯臨江水、南對江南之博望山。（中略）江東岸有博望山、屬姑熟。二山隔江相對、望之如門、南朝謂之天門山。兩岸山頂各有城、竝將軍王玄謨所築、自六代爲都、皆于此屯兵捍禦」。

⑧ 卻月城 卻月は、半月、弓張り月。『太平寰宇記』一三一、淮南道九漢陽軍漢陽縣に、「卻月城、與魯城相對、以其形似卻

月故。『荊州記』云、「河口北岸臨江水有卻月城、魏將黃祖所守、吳遣董襲攻而擒之。其城遂廢」。なお、この個所に相當する『宋書』王玄謨傳には、卻月城をめぐる攻防について次のように記される。「及南郡王義宣與江州刺史臧質反、朝廷假玄謨輔國將軍、拜豫州刺史、與柳元景南討、軍屯梁山、夾岸築偃月壘、水陸待之。義宣遣劉湛之就臧質、陳軍城南、玄謨留老弱守城、悉精兵接戰、賊遂大潰」。

義宣與質相失、各單舸逆走、與義宣相隨、船舸猶有百餘艘。女先適臧質子、過尋陽、入城取女、載以西奔。至江夏、聞巴陵有軍、懼被鈔、回入逕口、步向江陵。衆散且盡、脚痛不復行、就民間僦露車自載。無復食、緣道求告。至江陵郭外、遣人報竺超民、超民具羽儀兵衆迎之。時内外猶自如舊、帶甲尙萬餘人、義宣既入城、仍出聽事見客、左右翟靈寶戒使拊慰云、「昔漢高祖百敗、終成大業」。而義宣忘所戒、誤云、「項羽千敗」。衆咸掩口而笑。乃於内戎服、携息悒及所愛妾五人、皆著男子服相隨。入城内擾亂、白刃交橫、義宣大懼落馬、仍便步出。超民送出城外、未至郭、將士逃散都盡、唯餘悒及五妾兩黃門而已。夜還向城、入南郡空廨、

無牀^{*}、席地寢。至旦、遣黃門報超民、遣故車一乘、載送刺
 姦^⑭。義宣止獄戶内、坐地歎曰、「臧質老奴誤我」。始與五妾
 俱入獄、五妾尋被遣出、義宣號泣語獄吏曰、「常日非苦、
 今日分別始是苦」。尋盡殺之^⑮。

劉義宣と臧質は離れ離れになり、おのおの船で川をさかのぼった。劉義宣に従う船は、なおも百艘餘りあった。劉義宣の女は先に臧質の子に嫁いでいたので、尋陽（江西省）に立ち寄り、城内に入つて女を取りこみ、船に乗せて西に逃げた。江夏（湖北省武漢市）まで来たところで、巴陵（湖南省）に「朝廷の」軍があると聞き、襲撃を恐れて引き返して逕口（具體的な所在は不明）に入り、徒歩で江陵（湖北省）に向かった。軍勢は離散してしまい、脚の痛みで歩行もままならず、民衆から露車（無蓋の車）を雇つて乗った。食糧がなくなると、道すがら食べものを乞い求めた。江陵の城郭の外まで来ると、使者を遣つて竺超民に知らせ、竺超民は儀仗兵を伴つて出迎えた。そのころ城の内外は以前と變わらぬ狀況で、武装兵士はなお萬人餘りもあ

り、義宣は城内に入ると、従前通り執務し客に應對していた。側近の翟靈寶は客人たちを安心させようとして劉義宣を戒め、「昔、漢の高祖は百たび敗れて、大業を成し遂げた」といわせようとしたが、劉義宣は過つて、「項羽は千たび敗れて」といったので、皆は口を掩つて忍び笑ひした。かくて城内でも軍服を身に着けたまま、息子の愾と愛妾五人を、みな男子の服装で引き連れた。城内に入ると亂戦になつて、白刃が入り亂れ、劉義宣は恐れあまり落馬して、そのまま歩いて城外に出た。竺超民が城外に送り出したが、外城まで来ないうちに、將士はみな逃散してしまい、ただ愾と五人の愛妾と二人の宦官を残すだけになった。夜になつて城内に向かい、南郡の人氣のない役所に入り、「寢臺がないので」、地べたにむしろを敷いて寝た。翌朝、宦官を遣つて竺超民に知らせると、もと「劉義宣が」乗つていた車に、取調官を乗せて寄こした。劉義宣は獄に入れられ、地べたに坐つて歎息していった。「臧質の老いほれめに謀られた」。はじめ五人の愛妾もいっしょに獄に入れられていたが、やがて愛妾たちは追い出された。劉義宣は號泣し

て獄吏にいった。「今までは辛くなかったが、今日別れてはじめて辛くなった」。ほどなく全貞が殺された。

〔校勘〕

*逆…抄本・百子本・筆記小説大観本↓進。『宋書』と『南史』の本傳も逆。*唯…筆記小説大観本↓惟。*牀…抄本・四庫本↓床。*車…抄本↓乘。

〔注〕

⑨ 義宣與質相失云云 以下、江南での戦に敗れ、臧質ともはぐれた劉義宣は、命からがら治所のある江陵を目ざして逃れていった。『宋書』本傳に、「義宣與質相失、各單舸迸走、東人士庶竝歸順、西人與義宣相隨者、船舸猶有百餘。女先適臧質子、過尋陽、入城取女、載以西奔。至江夏、聞巴陵有軍、被抄斷、回入逕口、步向江陵。衆散且盡、左右唯十許人、脚痛不復能行、就民僦露車自載。無復食、緣道求告。至江陵郭外、遣人報竺超民、超民具羽儀兵衆迎之。時外猶自如舊、帶甲尙萬餘人。義宣既入城、仍出聽事見客、左右翟靈寶、誠使撫慰衆賓、以臧質違指授之宜、用致失利、今治兵繕甲、更爲後圖。昔漢高百敗、終成大業。而義宣忘靈寶之言、誤云『項羽千敗』。衆咸掩口而笑。魯秀・竺超民等猶爲之爪牙、欲收合餘燼、更圖一決、而義宣恬墊無復神守、入內不復出。左右腹心、相率奔叛。魯秀北走、義

金樓子譯注 (十二) (興膳)

宣不復自立、欲隨秀去、乃於內戎服、膾囊盛糧、帶佩刀、攜息愔及愛妾五人、皆著男子服相隨。城內擾亂、白刃交橫、義宣大懼、落馬、仍便步進、超民送城外、更以馬與之、超民因還守城。

義宣冀及秀、望諸將送北入虜。既失秀所在、未出郭、將士逃散、唯餘愔及五妾兩黃門而已。夜還向城、入南郡空廨、無牀席地。至旦、遣黃門報超民、超民遣故車一乘、載送刺姦。義宣送至獄戶、坐地歎曰、『臧質老奴誤我』。始與五妾俱入獄、五妾尋被遣出、義宣號泣語獄吏曰、『常日非苦、今日分別始是苦』。

⑩ 聞巴陵有軍 劉義宣の逃避行を記す『資治通鑑』宋紀十、孝武帝孝建元年の胡三省注に、「巴陵之郡、蓋韋崧之兵也。或曰、湘州刺史劉遵考之兵也」。

⑪ 竺超民 竺超民（生卒年未詳）は、青州刺史竺夔の子。劉義宣に重用されて、丞相司馬・南平内史となった。『宋書』劉義宣傳に記事がある。

⑫ 聽事 「聽」は「廳」に同じ。役所。

⑬ 入南郡空廨 『資治通鑑』宋紀十の胡三省注に、「南郡太守廨舍、蓋在江陵城外」。

⑭ 刺姦 官吏の不正を糾察する係官。漢の王莽の時代に始めて置かれた。『漢書』王莽傳下に、「納言馮常以六筦諫、莽大怒、免常官。置執法左右刺姦、選用能吏侯霸等、分督六尉・六隊、如漢刺史、與三公士郡一人從事。』『宋書』三九百官志上に、「又置外刺姦主罪法。』『資治通鑑』宋紀十に劉義宣の事件を記して、「超民收送刺姦」といい、その胡三省注に、「自漢以來、

公府有刺、姦搽」とある。

⑮ 尋盡殺之 『宋書』六孝武帝紀に、「孝建元年六月」庚寅、義宣於江陵賜死」。また『宋書』本傳に、「荊州刺史朱」脩之至江陵、已於獄盡焉。時年四十。世祖聽還葬」。

50 劉休範欲舉兵、襲朝廷、密與典籤新蔡人許公興謀之。

上表治城樓堞、多解榜板、擬以供用。遂舉兵反、虜發百姓船乘、使軍隊稱力請受、付以先解榜板、合手裝治、二三日間、便悉整辦。率衆二萬、鐵騎數百匹、發自尋陽、盡晝夜取道。大雷戍主杜道欣馳下告變、道欣至一宿、休範已至新林、朝廷震動。步上攻新亭壘、自臨城南、於前巘樓上、以數百人自衛。屯騎校尉黃回見其可乘、乃僞往請降、并詐宣齊王意旨、休範大說、以二子德宣・德嗣與回爲質、至卽斬之。

劉休範（宋の桂陽王）は兵を擧げて、朝廷を襲撃しようとし、祕かに典籤である新蔡の人許公興に謀った。城樓の堞を修理するよう上表し、多くの羽目板を外して、それを役立てようと考えていた。遂に兵を擧げて叛亂を起こし、民間の船や車を徵發して、部隊の規模に應じて借り上げさ

せ、先に外しておいた羽目板を付與して、總掛かりで取りつけ、二三日の間に、すっかり準備が整った。兵士二萬人と、騎馬數百頭を率いて、尋陽（江西省）を出發し、晝夜兼行で進軍した。大雷戍（安徽省望江縣にあつた軍事根據地）の司令官杜道欣が馳せつけて變事を告げようとしたが、彼が一日分の行程を進む間に、劉休範はすでに新林（建康の西南）にまで達しており、朝廷を震いあがらせた。劉休範は歩いて上つて新亭（建康西南の要衝）の防壘を攻撃し、城南に臨み、前巘樓の上で、數百人を従えて陣を構えた。屯騎校尉黃回はつけいる隙があると見て、僞つて降伏を申し出て行き、さらにそれが齊王（後の南齊の高祖蕭道成）の考えたと騙したので、劉休範は大いに喜び、二子の德宣と德嗣を黃回に與えて人質としたが、「黃回は」二人がやつて來るとすぐさま斬り殺した。

〔注〕

① 劉休範 劉休範（四四八―四七四）は、宋の文帝の第十八子で、明帝の弟。母は苟美人。九歳で順陽王に封ぜられ、翌年には桂陽王に改封された。凡庸で辯舌の才もなく目立たぬ性格で、

明帝の恐怖政治の下でも難を免れていたが、明帝が崩御すると、處遇に不満を抱き、叛亂を企てたものの、失敗し、殺された。

『宋書』七九文五王傳・『南史』一四宋宗室及諸王傳に傳がある。

② 欲舉兵襲朝廷云云 『宋書』本傳に、「及太宗晏駕、主幼時艱、素族當權、近習秉政、休範自謂宗戚莫二、應居宰輔、事既不至、怨憤彌結。招引勇士、繕治器械、行人經過尋陽者、莫不降意折節、重加問遣。□□留則傾身接引、厚相資給。於是遠近同應、至者如歸。朝廷知其有異志、密相防禦、雖未表形迹、而覺難已成。母苟太妃薨、葬廬山、以示不還之志。解持中。時夏口闕鎮、朝議以居尋陽上流、欲樹置腹心、重其兵力。元徽元年、乃以第五皇弟晉熙王燾爲郢州刺史、長史王奐行府州事、配以資力、出鎮夏口。慮爲休範所撥留、自太子泚去、不過尋陽。休範大怒、欲舉兵襲朝廷、密與典籤新蔡人許公興謀之。表治城池、修起樓堞、多解榜板、擬以備用。其年進位太尉。明年五月、遂舉兵反、虜發百姓船乘、使軍隊稱力請受、付以榜解板、合手裝治、二三日間、便悉整辦。率衆二萬、鐵騎數百匹、發自尋陽、晝夜取道。(中略)大雷戍主杜道欣馳下告變。道欣至一宿、休範已至新林、朝廷震動。平南將軍齊王出次新亭壘、領軍將軍劉勳・前兗州刺史沈懷明據石頭、征北將軍張水屯白下、衛將軍袁粲・中軍褚淵・尚書左僕射劉秉等人衛殿省。時事起倉卒、不暇得更處分、開南北二武庫、隨將士意取。休範於新林步上、及新亭壘、自臨城南、於臨滄觀上、以數十人自衛。屯騎校尉黃回見其可乘、乃僞往請降、并宣齊王意旨、休範大悅、以二子德宣・德嗣付回與

爲質、至即斬之。回與越騎校尉張敬兒直前斬休範首、持還、左右竝奔散。

③ 典籤 元來は文書を司る官吏。ことに南朝の宋齊時代に、宗室の諸王の下に置かれて、大きな権限を持つようになった。

『資治通鑑』宋紀二、文帝元嘉元年至梁の裴子野の論を引いて、「幼王臨州、長史行事、宣傳教命。又有典籤、往往專恣、竊弄威權、是以本根雖茂而端良甚寡」。胡三省注に、『南史』(七七呂文顯傳)を引いて、「府州部內論事、皆籤前直敘所論之事、後云謹籤、日月下又云某官某籤、故府州置典籤以領之。本五品吏、宋初改爲士職。宋末、多以幼少皇子爲藩鎮、時主以左右親近領典籤、其權任遂重」。また同宋紀一〇の孝武帝孝建二年にも、前出の『南史』にもとづいて同趣旨の論を置く。

④ 虜發百姓船乘 『資治通鑑』宋紀一五、蒼梧王元徽元年では、「掠民船」に作る。

⑤ 使軍隊稱力請受 『資治通鑑』一五の胡三省注に、「稱力請受者、稱其衆力之多少而請船也」。

⑥ 朝廷震動 『資治通鑑』宋紀一五は「朝廷惶駭」に作る。

⑦ 步上攻新亭壘云云 『資治通鑑』宋紀一五は以下のように作る。「壬辰、休範自新林捨舟步上、其將丁文豪請休範直攻臺城。休範遣文豪別將兵趣臺城、自以大衆攻新亭壘。「蕭」道成率將士悉力拒戰、自己至午、外勢愈盛、衆皆失色、道成曰、「賊雖多而亂、尋當破矣」。休範自服、乘肩輿、自登城南臨滄觀、以數十人自衛」。胡三省注に、「臨滄觀在勞山上、江寧縣南十五里、

亦曰勞勞亭」。

51 蕭遙光將敗、都不復識人。孫樂祖・曹樹生常心腹委付。後望見火起、問左右、「此是何火」。答曰、「下官向令人燒外間」、仍問、「卿是誰」、曹樹生答曰、「是孫樂祖」。仍問曹、「卿復是誰」、曹以名答。仍言左右、「下官熱發、可覓冷沈飲」、并勸始安且還別省消息。於是呼疊至、始安便移殺。於時名士皆在側、見不識人、沈昭略・昭光之徒、一時皆去。

蕭遙光（齊の始安王）は戦に敗れんとするとき、人の見分けがつかなくなっていた。孫樂祖と曾樹生を常に腹心として頼みにしていた。のちに火の手が擧がるのを望みやっつて、侍臣に問うには、「あれは何の火だ」「わたくしが人に火をつけさせました」と答えると、なおも「おまえは誰じゃ」と聞くので、曾樹生が「これは孫樂祖にございます」と答えた。するとなおも曹に、「おまえは誰じゃ」と聞くので、曹樹生は自分の名前を答えた。さらに侍臣にい

うには、「わしは身體がほてってきたので、冷たい飲みものをくれぬか」。侍臣たちはみな始安王にしばらく別の御殿に遷って休息するよう勧めた。そこで輿を呼び寄せて、始安王はそれに乗っていった。そのとき名士たちがいずれも側にいたが、誰が誰だか識別もつかず、沈昭略・沈昭光などの人々は、一齊にみな逃げ去ってしまった。

〔校勘〕

* 仍問…各本とも上に「左右」二字が有るが、削る。注⑤参照。
* 卿…底本に無し。抄本により補う。

〔注〕

① 蕭遙光 蕭遙光（？～四九九）、字は元暉、齊の明帝の兄胤の子。宋末に父の爵位を嗣いだ。明帝に重んぜられて、種々の謀議に與り、明帝の恐怖政治の影の演出者になっていた。明帝の死後、後事を託されて東昏侯を輔佐したが、やがて帝の廢立を企てて失敗し、殺された。『南齊書』四五宗室傳・『南史』四一齊宗室傳に傳がある。

② 將敗云云 蕭遙光の條には大きな問題點がある。その第一は、他の諸條と異なつて、明確に依據したと見られる史書が存在しないことである。『金樓子』の著者蕭繹は『南齊書』をもちろ

ん読んでいたはずだが、『南齊書』にもとづいたと断言できる個所は認められない。『隋書』経籍志によれば、齊に關する史書には、劉陟『齊史』十卷、沈約『齊紀』二十卷、江淹『齊史』十三卷（以上、史部正史類）、吳均『齊春秋』三十卷、王遼『齊典』五卷、撰者未詳『齊典』十卷（以上、史部古史類）があったことが知られるが、蕭繹はそのいずれかを據り所としていた可能性がある。問題點の第二は、文章の流れが悪く、錯簡や脱落を疑わせる個所が少なからず存することである。たとえば前半の「蕭遙光將敗」に始まる蕭遙光の異常な言動を描く一段は、後半の「遂動心疾」（心疾）は精神的な障害をいう以降に本来あるべき内容ではあるまいか。だから以下に引用する『南齊書』の記事は、あくまで參考資料と見なすべきものに過ぎない。因みに「蕭遙光將敗」から「一時皆去」までの部分は、『南齊書』にも『南史』にもこれに相當する記事がない。

③ 孫樂祖 『南齊書』八和帝紀に、「中興元年秋七月」丁卯、魯山城主孫樂祖以城降」とある。曹樹生については、未詳。

④ 下官 一般に官吏が自稱として用いる一人稱。後世の戯曲・小説によく用いられる。清の趙翼『陔餘叢考』三七「下官」參照。

⑤ 仍問 諸本ともに上に「左右」二字があるが、下の「卿是誰」の主語は明らかに蕭遙光であり、衍字と見なして削る。

⑥ 卿 ぞんざいな語感の二人稱。現代中國語の「你」に相當し、「君」がていねいな語感の「您」に相當する。蕭遙光は孫樂祖

に對して「卿是誰」と尋ねたのに對して、曹樹生が本人に代わつて、「是孫樂祖」と答えている。

⑦ 下官熟發 この發言の主語も蕭遙光だが、一人稱として「下官」を用いるのはふさわしくない。あるいは彼の錯亂ぶりを示唆したものが。

⑧ 始安便移殺 「移殺」は、このままでは意味不明。『金樓子疏證校注』が「殺」を「殿」の訛かというのに做つて譯す。

⑨ 沈昭略・昭光之徒二句 沈昭略は、吳興武康（浙江省）の人。剛氣の人として知られ、侍中に任ぜられた。昭光は、その弟。『南齊書』四四に叔父沈文季に付して傳があり、以下のようにいう。「永元元年（四九九）、始安王遙光起兵東府、執昭略於城內。昭略潛自南出、濟淮還臺。」

遙光美風姿、眉目如畫、髮鬢若點漆、隆準、口如含丹而足蹇、體殊肥壯、脚如三歲小兒。^⑩性聰察、善吏政、每至理朝廷大事及揚州曹獄、動至三四更。前列倡人、後列侍女、華燭照爛於其間、手提玉柄毛扇。有時以金鏤炙刀、自割牛脰而食之。每明帝有所誅殺、必先取其名。明帝大漸、^⑪託以後事、後主疑焉。常就王索寶物、王奉琥珀盤螭二枚、^⑫枚廣五寸、炯然洞徹、無有瑕滓。後主怒云、「琥珀者、欲使虎來拍我也」。仍匍匐下地、作羊行、遂動心疾。有時著衣袂

而伏地、入戸扇裏。王交道素壯、不勝忿怒。一旦以手扳陰、遂長數尺^⑬。屢有別舍恆見丈夫露髻、從屋來下以鬻人、俄失所在。又有殺鬼來其齋間、^{*}鬻兒鞭之、流血而反。常所親信鮮卑道兒及闍人吳明紹、頭臥道兒膝上、至四更中覓飲、已而無人矣。喚道兒、又不得、唯明紹伏牀下、^{*}答云、「人皆叛去」。衆軍悉至、於牀下斬之。

遙光はりっぱな風采で、眉目は繪に描いたようであり、髻髪は漆を塗ったかと思われ、鼻筋が通つて、口は丹を塗つたようだったが、足が跛で、身體がひどく肥満しているため、脚は三歳の幼兒のようだった。生まれつき聰明で、行政の仕事善くこなし、朝廷の大事や揚州の訴訟業務を處理する際には、ともすると三四更の深夜にまで及んだ。前には俳優、後ろには侍女を控えさせ、その間に蠟燭が明るく輝き、王は玉の柄のついた毛扇を手にしていた。時には金をちりばめた焼き肉用の刀で、自ら牛の胃を割いて食べた。明帝が誰かを誅殺する際には、いつも必ず先に「遙光に向かつて」その名を擧げた。明帝が危篤状態になると、

遙光に後事を託し、そのため後主（明帝の子の東昏侯蕭寶卷）は彼に疑念を抱いていた。かつて後主が始安王に寶物を要求したとき、王は琥珀製の螭がとごろを巻いた大皿二枚を献上したが、それらは一枚の幅が五寸もあり、輝くばかりに透き通つて、全く瑕のない逸品だった。後主は怒つていった、「琥珀を寄こすとは、虎を放つて余を拍たせるつもりだろう」と。そこで王は地面に這いつくばつて、羊のまねをして歩き、それがもとで心に異常を來した。ある時には袷の服を着て地につつ伏し、扉の中に入りこんだ。（以下「王交道素壯」から「遂長數尺」迄の四句、意味不明につき、譯出せず。）しばしば別殿で一人の丈夫が髻を露出したまま屋根から下りてきて人に噛みつき、すぐに姿が消えてしまった。また幽鬼が書齋にやつて來て、輿擔ぎの者が鞭打つと、血を流して反つていった。日ごろ信用している側用人に鮮卑族の道兒と宦官の吳明紹がおり、「王は」道兒の膝を枕に寝ていたところ、四更になつて水が飲みたくなつたが、もはや人影はなかつた。道兒を呼んでも、やつて來ない。明紹だけが寢臺の下にもぐつていて、「みな逃げ

てしまいました」と答えた。大軍が押しよせてきて、王は寝臺の下で斬殺された。

〔校勘〕

*『永樂大典』一九六三六の一屋・目の「眉目」に、「梁蕭遙光美風姿云云」と、脚如三歳小兒「までの一段を引く。文字の異同はなし。*閣・抄本↓合。*牀・抄本↓床。

〔注〕

⑩ 脚如三歳小兒『南齊書』本傳に、「生有臂疾、太祖謂不堪奉拜祭祀、欲封其弟、世祖諫、乃以遙光襲爵」。「足疾不得同朝列、常乘輿自望賢門入」。『南史』本傳にも同内容の記事がある。

⑪ 善史政『南齊書』本傳に、「遙光好吏事、稱爲分明、頗多慘害」。『南史』本傳も同じ。

⑫ 每明帝有所誅殺云云『南齊書』本傳に、「每與上久清閑、言畢、上素香火、明日必有所誅殺」。『南史』本傳にも同内容の記事がある。

⑬ 明帝大漸云云『南齊書』本傳に、「帝不豫、遙光數入侍疾、帝漸甚、河東王鉉等七王一夕見殺、遙光意也。帝崩、遣詔加遙光侍中・中書令、給扶。永元元年、給班劍二十人、即本號開府儀同三司。遙光既輔政、見少主即位、潛與江祐兄弟謀自樹立。弟遙欣在荆楚、擁兵居上流、密相影響」。

金樓子譯注（十二）（興膳）

⑭ 後主 東昏侯蕭寶卷（四八三〜五〇一）をいう。蕭寶卷、本名は明賢、字は智藏。明帝の第二子。在位四九八〜五〇一。政事を側近に委ねて、奢侈に溺れ、宰臣を誅殺して孤立し、最後は蕭衍（のちの梁の武帝）の軍に包圍されて自滅した。『南齊書』七東昏侯紀・『南史』五齊本紀下。

⑮ 王奉琥珀盤螭二枚云云 この故事の來歴は定かでない。東昏侯は「琥珀」の「琥」を「虎」に、「珀」を「拍」にこじつけて怒っている。また「仍匍匐下地」以下の主語は明らかに蕭遙欣だが、前後に脱誤があると推測される。注②参照。

⑯ 王交道素壯四句 前後に恐らく脱文があり、意味不明。『金樓子疏證校注』は「交道」について、「男性生殖器」と注するが、根據未詳。

⑰ 屢有別舍恆見丈夫露髻云云 以下の故事も全て出處未詳。

52 蕭子響^①在荊州造仗^②。長史・司馬皆以啓聞。王知大怒、乃僞請入坐起^③。既至坐、厲聲色而語曰、「身父則是天子。政復造五千人仗、此復何嫌、而君遂以上啓」。二人下牀叩頭、拔褥刀自下斬之。甚有脅力、曾出獵、頭亂、呼梳取刷於馬上、以手捉左右禮帶、去地數尺、令料頭竟、乃放之。此其勇也。竟被誅。

蕭子響（齊の魚復侯）は荊州にいたとき兵器を造成させた。長史「劉寅」や司馬「席恭穆」はみなそのことを上奏した。王はそれを知って大いに怒り、偽りの口實を設けて彼らを呼びつけた。一同が座に着くと、聲を荒げていった。「わが父は天子なるぞ。たかが五千人の兵器を造成するのに、諸君はまた何に氣を使つて、上奏することがあるのか」。二人は牀を下りて叩頭したが、「蕭子響は」佩刀を抜いて自ら斬り殺した。きわめて腕力が強く、かつて狩獵に出かけた折り、頭髮が亂れて、馬上で梳らせるのに、手で侍臣の帯をつかんで持ち上げ、地面から數尺離れたところで、頭を整えさせてから、手を放して下ろした。その武勇はこんなものだった。最後には誅殺された。

〔注〕

- ① 蕭子響 蕭子響（四六八〜四八九）、字は雲首、武帝の第四子。母は張淑妃。豫章王暉の養子となつた。勇力を以て聞こえた。荊州刺史に在任中に本條に記されるような兵器事件を起こし、自殺に追いこまれた。王から位を魚復侯に落とされた。『南齊書』四〇武十七王傳・『南史』四四齊武帝諸子傳に傳がある。
- ② 在荊州造仗云云 この條も前條と同じくもつた資料は未

詳。ただし、この故事に關連する記事は、以下の通り『南齊書』本傳に見える。「永明」七年、遷使持節・都督荆・湘・雍・梁・寧・南北秦七州軍事、鎮軍將軍・荊州刺史。子響少好武、在西豫時、自選帶仗左右六十人、皆有膽幹。至鎮、數在內齋殺牛置酒、與之聚樂。令內人私作錦袍絳襖、欲餉蠻交易器仗。長史劉寅等連名密啓、上勅精檢。寅等懼、欲祕之。子響聞臺使至、不見勅、召寅及司馬席恭穆・諮議參軍江愈・殷曇榮・中兵參軍周彥・典籤吳脩之・王賢宗・魏景淵於琴臺下詰問之。寅等無言。脩之曰、「既以降勅旨、政應方便答塞」。景淵曰、「故應先檢校」。子響大怒、執寅等於後堂殺之。同内容の記事が『南史』本傳にもある。「仗」は、廣く武器をいう。

- ③ 坐起 文字通りには、坐り起ち上がる。立ち居ふるまい。『禮記』儒行篇に、「儒有居處齊難、其坐起恭敬」。
- ④ 甚有膂力 『南齊書』本傳に、「子響勇力絶人、關弓四斛力、數在園池中帖騎馳走竹樹下、身無虧傷」。『南史』本傳にも同内容の記事がある。

金樓子卷第三

（この譯注の作成に當つては、青山剛一郎・小野夕子・杉山禮子・永田知之・渡邊登紀の五氏による草稿を参照した。記して謝意を表する。）